琉球大学学術リポジトリ

中学生のLINEにおけるコミュニケーションの様相

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター 公開日: 2017-06-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 志麻, 神村, 優華, Kimjo, Shima, Kamimura, Yuka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/36895

中学生のLINEにおけるコミュニケーションの様相

金城志麻 *　神村優華 **

A Survey on Communication in LINE for Junior High School Students

Shima KINJO　Yuka KAMIMURA

背景・目的

中学生におけるSNS

近年，“ネット社会”“情報化社会”といわれるように情報技術の発展に伴い，私たちの周りには様々な電子機器が普及し，誰もが容易にインターネットを利用することができる時代になった。その普及率も年々増加しており，平成25年末時点には推定人口の8割を超した(総務省，2014)。さらに，学校教育現場においても，電子黒板や，タブレット型端末といったICT（Information and Communication Technology；情報通信技術）を活用した教育が全国各地で導入・実用化され始めており(文部科学省，2014)，これらの機器は現代社会を生きる児童・生徒たちにとって，日々の生活から決して欠かすことのできないツールとなっている。

インターネットの普及に伴い，個人が作成するWebサイトや，他者とコミュニケーションをとることのできるサイトが数多く作られ，コミュニケーションの形態は大きく変化してきた(田淵・則定，2012)。2004年頃には，人と人との繋がりを促進・サポートする機能を持ち，ユーザー間のコミュニケーションがサービスの価値の源泉となっている会員専用のウェブサービスであるSocial Networking Service(以下，SNS)が出現した(総務省，2009)。中学生においては約9割が情報通信機器を所有，その中の約6割の生徒がSNSを利用している(西村，2015)。SNSは中学生にとって“他者との繋がり”を実感し，現存する友人関係を維持し繋ぎとめ，さらに新しい友人関係を構築し人脈を広げる身近なコミュニケーションツールである(鄭，2008)。杉谷(2010)は，相手にメッセージを送信する際に慎重に文章を考えることが可能であることを指摘している。また笹倉(2011)は，SNS上に記事を書くことで自己理解の作用や浄化作用，また他者から理解される体験が出来ることが重要な動機づけとなると述べている。他にも，メッセージのやりとりが両者の親密性を高めることにより(土井，2008)，ソーシャルサポートを求めることが容易になる(安藤ら，2005)ことも挙げられる。このようにポジティブな一面もある一方で，“他者との繋がり”を求めることにより依存に繋がることや(西村，2015)，長時間使用による生活習慣の乱れ(Miyazakiら，2013)，ネット上に悪口や個人情報を書き込むといった誹謗中傷によって引き起こされるネットいじめの問題(寺戸，2014)，プライベート空間でも友人関係を維持するために絶えずメールやチャットの返信に翻弄され，落ちついて過ごすことのできる場所がなくなることが考えられ(西村，2015)，問題は多岐にわたり非常に深刻となっている。近年SNSの中でもLINEの利用者が急増しており，中でも10代のLINE利用率は70.5％と最も高くなっている(総務省情報通信政策研究所，2013)。

LINEについて

LINEとは，24時間，いつでも，どこでも，無料で好きなだけ通話やメールが楽しめる新しいコミュニケーションアプリである。LINEのユーザー同士であれば，いくら使用しても無料であり，更にアンドロイドアプリだけではなくiPhoneアプリも登場しているため，iPhoneとアンドロイド間でも通話やチャットを楽しむことができ，今やGメールや携帯メール・通話を代替した(植田，2013)。1対1のトークやグループトークも

* 琉球大学教育学部生涯教育課程心理臨床科学コース
** 七田チャイルドアカデミー

可能であり，無料ビデオ通話や無料音声通話も出来る。加藤 (2013) は，LINE は他者とのリアルタイムなやりとりが可能となるという利点を指摘している一方，いじめや軽はずみな情報発信など様々な問題が起こっているのも現状である (東京新聞 , 2013 他)。しかし，LINE のトラブルは増えてきている一方で，どのような LINE の使い方をしているのかといった具体的な LINE の使い方に対する実態は明確にされていない。現代の中学生が最も利用しているアプリであることや，SNS の中でも LINE は「閉鎖的」なアプリであり (植田，2013)，実際の友人とのコミュニケーションツールとして利用されていることから，学校場面における友人関係が一番反映されるコミュニケーション道具であると考えられる。学校場面での友人関係が LINE を通してどのように利用されているのか，またその際の心理状態を検討していくため，中学生における LINE でのコミュニケーションの実態を明らかにする必要があると考えられる。

加えて，木村 (2015) は，親はインターネットに苦手意識を持つ者も多く，子供の使用目的を把握できていないと述べている。このことから，LINE 使用のコミュニケーションの様相を調査することで，“ いかに利用するのか ” という視点で，親や教師に使用状況を把握してもらい，生徒に対する情報モラルの教育や LINE との付き合い方を真剣に考えるきっかけを提供できるだろう。

本研究の目的

現代の中学生において，切っても切り離せない存在であるコミュニケーションツール LINE を，どの程度・どのように使っているかといった実態調査を行うこととする。

方法

調査対象者

県内中学校 4 校に通う 683 名のうち，欠損値を除く 606 名 (男子 291 名，女子 304 名，平均 13.75 歳，SD ＝ .932) を分析対象とした。

調査期間

2015 年 12 月上旬～ 12 月下旬にかけて質問紙調査をおこなった。

質問紙の構成

質問紙は，学校で回答する質問紙と，自宅で回答する質問紙の 2 種類から構成されていた。

【1】学校記入の質問紙

学校で回答する質問紙はフェイスシート (1)，自作の質問紙 (2) ～ (8) から構成された。自作の質問紙は，西村 (2015)，津田ら (2015) 等を参考に “LINE の利用状況 ”，“ 既読の確認有無 ”，“ メッセージ送受信の際の不安やプレッシャー ”，“LINE はずし ”“ タイムライン機能について ”“ 保護者の関与 ” 等を尋ねた。自作の質問紙を作成するにあたり，臨床心理学専門教員 1 名，臨床心理学を専攻する大学院生 1 名と共に質問紙の内容や教示文の検討を行った。

(1) フェイスシート

性別，学年，学級，出席番号，生年月日，年齢，携帯電話の使用有無，無料コミュニケーションツールアプリ (Facebook，twitter，LINE，instagram) の使用有無，またその使用している端末の所有者 (自分，保護者，その他) について回答を求めた。学年，学級，出席番号の記入を求めたのは，学校記入の質問紙と，自宅記入の質問紙の 2 つの質問紙を，回収後に一致させるためである。出席番号を記入することにより，個人を特定されることへの不安から，本音を書くことに対して恐れを抱くことも考えられるため，それぞれの質問紙は各自封筒にいれて封をして提出するよう求めた。

(2)LINE の利用状況に関する項目

日常においてどのように LINE を利用しているのか，その使い方を知るため，以下の項目について尋ねた。

①平日と休日でやり取りする個人トーク (1 対 1) の人数

1 日に行う LINE の個人トーク (1 対 1) の平均人数について，「0 人」「1 ～ 3 人」「4 ～ 6 人」「7 ～ 10 人」「10 人以上」の中から当てはまる項目 1 つに回答を求めた。また，平日と休日それぞれの場合においても回答を求めた。

②平日と休日でやり取りするグループの人数

1 日に LINE でトークするグループの平均数について，「0 グループ」「1 ～ 3 グループ」「4 ～ 6 グループ」「7 ～ 10 グループ」「10 グループ以上」の中から当てはまる項目 1 つに回答を求めた。また，平日と休日，それぞれの場合においても回答を求めた。

③平日と休日の LINE 利用時間

1 日に LINE を利用する平均時間について，「30 分未満」「30 分～ 1 時間」「1 時間～ 2 時間」「2 時間～ 3 時間」「3 時間～ 4 時間」「4 時間以上」の中から当てはまる項目 1 つに回答するよう求めた。また，平日と休日，それぞれの場合におい

ても回答を求めた。

(3) 既読の確認有無

受け取ったメッセージを読んだ印としてつく“既読”がついているか否かを確認しているかどうかを調べるため，「あなたはメッセージを送った相手に対して，既読がついたかどうか確認しますか。」という質問に対して「確認しない：1」～「よく確認する：4」の4件法で回答を求めた。

(4) メッセージ送受信の際の不安やプレッシャー

LINEの中でメッセージの送り手，受け手になった際にどの程度不安やプレッシャーを感じるのかを調べるため，以下の2つの項目について尋ねた。

①メッセージを送る際の不安

「あなたが個人LINE(1対1)と，グループLINEでメッセージを送る際，どれぐらい不安を感じますか。」という質問に対し「まったく感じない：1」～「とても感じる：6」の6件法で回答を求めた。またグループLINEでも少人数のグループから大人数のグループが想定されることから，「グループLINE(グループの人数が3～5人)」「グループLINE(グループの人数が6~10人)」「グループLINE(グループの人数が11人以上)」と人数別に3つに分けて回答を求めた。

②メッセージを受け取った際の返信のプレッシャー

「あなたが個人LINE(1対1)と，グループLINEでメッセージを受け取った際，どのぐらい返信のプレッシャーを感じますか。」という質問に対し「まったく感じない：1」～「とても感じる：6」の6件法で回答を求めた。上述した“①のメッセージを送る際の不安”と同様にグループLINEは人数別に3つに分けて回答を求めた。またメッセージを受け取った際，メッセージを読み“既読”をつける場合と，メッセージが来ていることがわかっていても，メッセージを見ずにそのままの状態にする“未読”の場合も考えられる。このことから，個人LINEにおいても，グループLINEにおいてもそれぞれ「既読の場合」と「未読の場合」で分けて回答を求めた。

(5)LINEはずし

①LINEはずし有無

日常におけるLINEはずしの有無を尋ねるため，「友達とのLINEの中でLINEはずしをされた経験がありますか」という質問に対し「ある」「ない」のどちらか一方を回答するよう求めた。LINEはずしについて認知していない生徒も考えられることから，「※LINEはずし：友だちからグループを退会させられた経験や，自分の知らないところで意図的に自分抜きでグループLINEを作られていた経験」の説明も質問の下に記載した。

②LINEはずしに対する気持ち

LINEはずしに対するプレッシャーを調べるため，「友だちとのグループLINEでどのぐらいLINEはずしをされたくないという気持ちがありますか」という質問に対し「まったくない：1」～「とてもある：6」の6件法で回答を求めた。

(6) タイムライン機能について

どうしてタイムライン機能を利用しているのか，また，なぜタイムライン機能を利用するのかを調べるため，「あなたはタイムライン機能を使って投稿しますか」という質問に対し「投稿する」「投稿しない」のどちらか一方を回答するよう求めた。「投稿する」と回答した生徒に対しては続けてタイムラインについて以下の質問項目を尋ねた。

①投稿内容

タイムラインではどのようなことを投稿しているか，ここ1ヶ月に投稿した内容について「1. 趣味や好きなものについて」「2. 連絡事項」「3. 最近あった良い出来事」「4. 最近あった悪い出来事」「5. 直接人に向かって言えない悪口」「7. 友だちの紹介文」「8. つらい思いをした経験」「9. 好きな人について」「10. 近況報告」「11. LINEバトン」「12. “いいねスタンプ”のお願い」「13. 友達整理」「14. 個人LINEへの誘導」「15. その他」の中からあてはまる内容すべてに回答するよう，回答を求めた。また，「15その他」に関しては自由記述出来る欄も設けた。

②投稿理由

タイムラインに投稿する理由を「1. 落ち込んでいるから」「2. さびしいから」「3. 悩んでいるから」「4. 書くことでスッキリするから」「5. 日々の出来事や感じたことを記録しておきたいから」「6. 自分のことを知ってもらいたいから」「7. 友達が投稿しているから」「8. 共感してほしいから」「9. 友だちにいいねスタンプを押してほしいから」「10. その他」の10項目の中からあてはまる投稿理由すべてに回答してもらうよう，回答を求めた。また「10. その他」に対しては自由記述出来る欄も設けた。

③タイムラインの公開範囲

タイムラインの公開範囲について，「タイムラインを意図的に“公開していない”友人はいますか」という質問に対し，「いない」「いる」の2件法で回答を求めた後，さらに「いる」と回答した生徒に対しては「10人以下」「10～20人」「20～30人」「30人以上」の4件法で回答を求めた。

④友達のタイムライン投稿

友達が投稿したタイムラインを見るかについて「見る」「見ない」のどちらか一方を回答するよう求めた。「見る」と回答した生徒にはさらに，「友だちのタイムラインの投稿を見た時に，どの程度反応しますか。タイムライン上に出てきた10回の友だちの投稿に対して，“いいねスタンプ”や“コメント”をする回数をおおまかでかまいませんので該当する箇所に○をつけてください」という質問に対し「反応しない」「1～3回」「4～6回」「7～10回」の中から当てはまる項目1つに回答するよう求めた。

⑤友達の投稿に対するプレッシャー

友達の投稿に対して，どのぐらい“いいねスランプ”を押したり，“コメント”をするなど，反応することへのプレッシャーがあるのかを調べるため，「タイムラインの中で友だちの投稿に対してどのぐらい『“いいねスタンプ”を押さないといけない!!』という気持ちがありますか」「タイムラインの中で友だちの投稿に対してどのぐらい『“コメント”をしないといけない!!』という気持ちがありますか」という2項目の質問に対して「まったくない：1」～「とてもある：6」の6件法で回答を求めた。

(7) 保護者の関与

保護者からLINEを利用することに何らかの制限があるかを調べるため，保護者がLINEの内容を見るか，またLINE時間に制限はあるのかについて回答を求めた。

①保護者がLINEの内容を見るかを尋ねるため，「あなたの保護者はあなたのLINEのトークやタイムラインの内容を見ますか」の質問に対して「見る」「見ない」のどちらか一方を回答するよう求めた。

②LINE時間の制限があるかを尋ねるため，「あなたの保護者からLINE時間について制限がありますか」の質問に対して「ある」「ない」のどちらか一方を回答するよう求めた。また“ある”と回答した生徒に対してはさらに，どのような時間の制限があるか記入するよう求めた。

手続き

4校の中学校へ出向き，それぞれの校長・教頭に調査協力依頼を行った。実施の許可を得た上で，それぞれの中学校に質問紙を配布した。学級担任には学校記入，自宅記入の質問紙と共に質問紙調査実施の手順，生徒から質問があった際の解答例が記載された用紙を配布した。質問紙調査実施の手順は，最初に学校記入の質問紙と，両面テープで封の出来る長形4号の封筒を配布した。回答の前に，質問紙のフェイスシートに記載されている教示文を学級担任が読み上げ，フェイスシートの質問に全員が答えたことを確認した後，質問紙に回答するよう求めた。回答後は，質問紙を4つ折りし，さらに半分に折った学校記入の質問紙を長形4号の封筒に各自でいれ，封をして学級担任に提出をした。所要時間は10～15分程度であった。

次に，自宅記入の質問紙と長形4号の封筒を配布した。自宅記入の質問紙のフェイスシートに答えた後，封筒に入れて自宅に持ち帰り，自宅にて回答をしてもらった。その後，質問紙を4つ折りし，さらに半分に折った自宅記入の質問紙を長形4号の封筒に各自で封をしていれ，後日学校に持ってきて学級担任に提出するよう求めた。

結果

男女，学年それぞれ分けて分析を行った

(1) 携帯電話利用状況について

携帯電話利用状況ついて全体の約8割(79.8%)の生徒が携帯電話を所持してことが示された。性別，学年それぞれにおいて，携帯電話の利用状況に違いがあるのか連関性をみるためにχ^2検定を行ったところ性別，学年それぞれにおいて有意な差が認められ($\chi^2(1)=17.021$, $p<.001$：$\chi^2(2)=11.973$, $p<.01$)，残差分析の結果，男子よりも女子の方が，また1年生よりも3年生の方が有意に携帯電話利用率が高いことが示された。

(2)LINEとその他のアプリ利用状況

中学生のLINEの利用状況について，全体で，約7割の生徒がLINEを利用していることが明らかになった。LINEの利用状況に男女，学年それぞれにおいて違いがあるのか連関性をみるためにχ^2検定を行ったところ，性別，学年それぞれにおいて有意な差が認められ($\chi^2(1)=6.223$, $p<.05$：$\chi^2(2)=10.951$, $p<.01$)，残差分析の結果，男子よりも女子の方が，また1年生よりも2年生の方が有意にLINEを利用していることが示された。次にLINE以外のアプリ(Facebook，twitter，instagram)の利用状況について，LINE以外のアプリの利用率は全体の約3割(32.0%)であり，LINEの利用状況に比べると差があることが明らかになった。性別，学年それぞれにおいて，LINE以外アプリ利用状況に違いがあるのか連関性をみるためにχ^2検定を行った

ところ，どちらとも有意な差が認められ ($\chi^2(1)=19.858$, $p<.001$： $\chi^2(2)=28.860$,$p<.001$)，残差分析の結果，男子よりも女子の方が，1 年生よりも 2，3 年生の方が有意に LINE 以外のアプリを利用していることが示された。

(3) アプリ利用端末の所有者

LINE やその他のアプリを利用する際の端末の所有者状況について利用端末の所有者状況に男女，学年で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行ったところ，有意な差が認められ ($\chi^2(1)=19.858$, $p<.001$： $\chi^2(2)=9.422$, $p<.01$)，残差分析の結果，男子よりも女子の方が，3 年生よりも 1 年生の方が有意に保護者の端末でアプリを利用していることが示された。

(4) 平日と休日における個人トークの平均人数

平日と休日の個人トークの平均人数について，平日・休日どちらにおいても個人トークを行う平均人数は 3 人未満が最も多く，平日では全体の 6 割 (59.2％) を，休日では約 5 割 (47.1％) を占めていた。また平日よりも休日の方が個人トークをする人数は増加していた。それぞれ平日と休日の個人トーク人数について男女，学年で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行った結果，学年において平日と休日の平均個人トーク人数に有意な差が認められた (平日 $\chi^2(4)=16.777$, $p<.01$： 休 日 $\chi^2(4)=20.059$, $p<.001$)。残差分析の結果，平日の平均個人トーク数が 3 人未満の生徒は 2 年生よりも 3 年生の方が有意に多く，10 人以上の生徒は 2 年生の方が 3 年生よりも有意に多かった。また，休日の平均個人トーク数が 10 人以上の生徒は 3 年生よりも 1 年生の方が有意に多いことが明らかになった。

(5) 平日と休日におけるグループトークの平均人数

平日と休日のグループトークの平均人数について全体的に見ると，平日，休日どちらでもグループトークを行う平均数は 3 グループ以下が最も多く，平日，休日ともに約 9 割 (それぞれ 92.0％，86.9％) を占めていた。また，平日よりも休日の方がグループトーク数は増加していた。それぞれ平日と休日のグループトーク数について男女，学年で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行った結果，学年において休日の平均グループトーク数に有意な差が認められた ($\chi^2(4)=10.435$, $p<.05$)。残差分析の結果，休日に行うグループトーク数が 3 以下において 1 年生よりも 3 年生が有意に多く，4 ～ 10 のグループトーク数において 3 年生よりも 1 年生の方が有意に多いことが明らかになった。

(6) 休日と平日における平均利用時間

平日と休日の LINE 平均利用時間について平日では 1 時間未満の利用時間の生徒が多いが，休日では 1 時間未満の利用時間も 1 ～ 4 時間の利用時間の生徒も同様にいることが明らかになった。また，平日よりも休日の方が利用時間も長くなることが示され，特に女子においては，休日に 4 時間以上 LINE を利用している生徒が約 2 割いることが明らかになった。それぞれ平日と休日の利用時間において男女 , 学年で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行ったところ，性別において有意な差が認められ ($\chi^2(2)=6.277$, $p<.05$： $\chi^2(2)=17.281$, $p<.001$)，平日に 4 時間以上 LINE を利用する生徒は男子よりも女子の方が多く，休日においては，1 時間未満の利用時間は女子よりも男子の方が有意に多く，4 時間以上の利用時間は男子よりも女子のほうが有意に多いことが明らかになった。

(7)“ 既読 ” 機能に関する確認有無

メッセージを送った際，“ 既読 ” しているかどうかの確認有無について，個人トークで既読の確認をすると回答した生徒は約 7 割 (67.0%)，グループトークで既読の確認をすると回答した生徒は約 5 割 (47.7％) であった。グループトークよりも個人トークにおいて既読の確認をしている生徒の割合が多いことが示された。既読確認の有無において男女，学年で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行った結果，学年において有意な差が認められ ($\chi^2(2)=15.806$, $p<.001$)，残差分析の結果，1 年生のほうが 3 年生よりも有意に個人トークにおいて既読の確認を行っていることが明らかになった。

(8) メッセージを送る際に感じる不安 (個人トーク・グループトーク)

メッセージを友達に送る際に不安を感じるか，感じないかいついて，個人トークで不安を感じる生徒は全体で約 1 割 (7.8％) おり，グループトークにおいては約 2 割 (18.3%) いた。個人トークよりもグループトークの方がメッセージを送る際に不安を感じる生徒が多いことが示された。それぞれ個人トークとグループトークにおける不安に男女，学年で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行ったところ，性別の個人トークとグループトークにおいて有意な差が認められ ($\chi^2(1)=6.312$, $p<.05$： $\chi^2(1)=6.312$, $p<.05$)，

残差分析の結果，個人トーク，グループトークのどちらとも女子の方が男子よりも有意に不安を感じる生徒が多いことが示された。

(9) メッセージを“既読”にした際の返信のプレッシャー

メッセージを受け取り，読んだことが相手にも伝わる“既読”機能をつけた際にプレッシャーを感じるか，感じないかについて，個人トークにおいては約２割 (17.7％)，グループトークにおいては約１割 (12.9％) がプレッシャーを感じており，個人トークの方がグループトークよりもプレッシャーを感じる生徒が多いことが示された。既読時の返信のプレッシャーにおいて男女，学年で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行ったが，有意な差は，どちらとも認められなかった。既読時の返信のプレッシャーには性別の差も，学年の差もないことが示された。

(10)LINE はずしの経験有無と LINE はずしをされることへのプレッシャー

性別ごとの LINE はずしの経験と LINE はずしをされることへのプレッシャーについて，LINE 外しの経験があると答えた生徒は約１割 (12.0%) だった。LINE 外しの経験の有無において男女で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行ったが，有意な差が認められなかった。男子，女子共に LINE 外しの経験には差がないことが示された。また，LINE はずしをされたくないという気持ちがある生徒は全体の中で約６割 (57.7％) いたことから，半分以上の生徒が LINE 外しへのプレッシャーを感じていた。LINE 外しに対するプレッシャーに男女で違いがあるのか連関性をみるために χ^2 検定を行ったが，有意な差は認められなかった。男子女子共に同程度 LINE はずしへのプレッシャーを感じていることが示された。

次に LINE 外しの経験の有無，LINE 外しに対するプレッシャーにおいて学年で違いがあるか連関性をみるために χ^2 検定を行ったが，有意な差は認められなかった。学年では LINE 外しの経験には差がないこと，学年ごとに同程度 LINE はずしへのプレッシャーを感じていることが示された。

(11) タイムラインについて (投稿有無，投稿頻度，投稿内容，投稿画像，投稿理由，公開範囲)

・タイムライン投稿有無

タイムラインの投稿有無について，タイムラインに投稿すると回答した生徒は全体の約６割 (61.8％) だった。タイムライン投稿の有無に男女，学年で違いがあるか連関性をみるために，χ^2 検定を行ったところ，性別において有意な差が認められた ($\chi^2(1)=5.027$, $p<.05$)。残差分析の結果，女子の方が男子よりも有意にタイムラインに投稿していることが明らかになった。

・タイムライン投稿内容

タイムラインの投稿内容について，最も多い投稿内容が「最近あった良い出来事」，次に「友達の紹介文」「趣味や好きなものについて」「LINE バトン」であり，特にこの４つがタイムラインにおいて多く投稿される内容だった。まず，タイムライン投稿の内容に男女で違いがあるか連関性をみるために，それぞれの項目に χ^2 検定を行った結果，「直接人に言えない悪口 ($\chi^2(1)=3.990$, $p<.05$)」，「LINE バトン ($\chi^2(1)=6.800$, $p<.01$)」，「友達整理 ($\chi^2(1)=6.129$, $p<.05$)」において有意な差が認められた。残差分析の結果，３つの項目内容すべてにおいて，男子よりも女子の方が有意に多く投稿していることが明らかになった。

次に，タイムライン投稿の内容に学年で違いがあるか連関性をみるために，それぞれの項目に χ^2 検定を行った結果，「友達の紹介文 ($\chi^2(2)=10.200$, $p<.01$)」，「LINE バトン ($\chi^2(2)=11.286$, $p<.01$)」，「“いいねスタンプ”のお願い ($\chi^2(2)=13.015$, $p<.01$)」「友達整理 ($\chi^2(2)=8.361$, $p<.05$)」，「個人トークへの誘導 ($\chi^2(2)=11.284$, $p<.01$)」において有意な差が認められた。残差分析の結果，1，２学年の方が３学年よりも５つの項目内容において，有意に多く投稿していることが明らかになった。

・投稿理由

タイムラインの投稿理由について，投稿理由においては「その他」を除き，「日々の出来事や感じたことを記録しておきたいから」の理由が多かった。次に「共感してほしいから」「友達が投稿しているから」の理由で投稿する生徒が続いた。タイムライン投稿理由に男女，学年で違いがあるか連関性をみるために，それぞれの項目に χ^2 検定を行った結果，性別においては「日々の出来事を記録したいから ($\chi^2(1)=9.583$, $p<.01$)」という投稿理由に，学年においては「友達が投稿しているから ($\chi^2(2)=0.004$, $p<.01$)」，「“いいねスタンプ”を押してほしいから ($\chi^2(2)=8.799$, $p<.05$)」という投稿理由に有意な差が認められた。残差分析の結果，男子よりも女子の方が有意に日々の出来事を記録したいからという理由でタイムラインを投稿していること，友達が投稿しているから，“いいねスタンプ”を押してほしいからという理由でタイムラインを投稿してい

る生徒が3年生に比べて有意に1年生が多いことが明らかになった。

(13) 友達のタイムライン投稿について

・友達のタイムライン投稿を見るか

友達のタイムライン投稿を見るかについて，タイムラインの投稿を見ると回答した生徒は全体の約9割(94.7％)を示した。タイムラインを見るかについて男女，学年で違いがあるか連関性をみるため，χ^2検定を行った結果，性別，学年において有意な差が認められた($\chi^2(1)=6.276$, $p<.05$：$\chi^2(1)=7.745$, $p<.05$)。残差分析の結果，男子よりも女子の方が有意に友達のタイムライン投稿を見ていること，1年生よりも2年生の方有意にタイムライン投稿を見ていることが明らかになった。

・友達のタイムライン投稿に対する反応頻度

タイムラインで流れてくる10回の友達のタイムライン投稿に対して“いいねスタンプ”や“コメント”などを通して反応する頻度について，友達のタイムラインに反応すると回答した生徒は全体で約8割(83.8％)いた。特に10回のタイムライン投稿に対して7～10回反応すると回答した生徒は約2割(24.8％)いることが明らかになった。友達のタイムラインの反応頻度について男女，学年で違いがあるか連関性をみるため，χ^2検定を行った結果，学年において有意な差が認められた($\chi^2(6)=19.874$, $p<.01$)。残差分析の結果，友達のタイムライン投稿に，10回中7～10回反応すると回答した生徒は，3年生よりも1年生の方が有意に多いことが示された。

・いいねスタンプ・コメントに対するプレッシャー

友達のタイムライン投稿に“いいねスタンプ”や“コメント”をしなければならないというプレッシャーを感じるかについて，男女，学年共に“いいねスタンプ”の方が“コメント”よりもしなければならないというプレッシャーを感じていた。友達のタイムライン投稿へのプレッシャーについて男女，学年で違いがあるか連関性をみるため，χ^2検定を行った結果，学年において有意な差が認められた($\chi^2(2)=9.046$, $p<.05$)。残差分析の結果，3年生よりも1年生の方がいいねスタンプを押すことへのプレッシャーを有意に感じていた。

(14) 保護者からの制限の有無

保護者からLINEの使い方について制限があるかどうかについて，保護者からの制限の有無について男女，学年で違いがあるか連関性をみるため，χ^2検定を行った結果，性別，学年それぞれで有意な差が認められた($\chi^2(1)=12.942$, $p<.001$：$\chi^2(2)=13.334$, $p<.001$)。残差分析の結果，男子よりも女子の方が，3年生よりも1年生の方が有意に保護者からLINEの使い方について制限のある生徒が多いことが示された。

考察

(1) 携帯電話・SNSアプリの利用状況

携帯電話においては，約8割の生徒が携帯電話を利用しており，中学生の中でも一番利用率の高かったコミュニケーションツールLINEにおいては，約7割の生徒が利用していた。今日誰もが容易にインターネットを利用することが出来，上述した情報機器は，現代社会を生きる中学生にとって“必要不可欠なツール”“生活上の必須アイテム”として普及しているという西村(2015)の結果を支持した。また，本研究において尋ねた携帯電話，SNSアプリ(LINE，Facebook，twitter，instagram)の利用率は，男子よりも女子の方が高いことが明らかになった。木村(2015)は，男子よりも女子の方が他者との繋がりが強いことを示しており，その結果，いつでもどこでも気軽に繋がることの出来る携帯電話やSNSアプリの利用率が女子において高くなったことが示唆される。また，学年が上がるにつれ，携帯電話やSNSアプリの利用率も高くなっていることが示された。3年生よりも，自身の携帯・端末を持っていない1年生は，保護者の携帯・端末を利用して友達と連絡をとっていることが考えられる。1年生はまた，保護者の端末利用者約3割おり，保護者の携帯・端末を利用してまでも友達と連絡をとっていたいというつながりを求めた友人関係が見受けられたといえるだろう。本研究では検討してないが，携帯やLINEなどのアプリを持ってないと，話についていけない，仲間はずれにされるという背景も考えられる。

(2) 中学生のLINEの使い方

・個人トーク・グループトーク・利用時間

個人トークにおいては，平日も休日も3人以下，4～10人という生徒が8割以上を占めており，中学生に多く見られる1日の個人トーク数は10人以内であることが示された。グループトーク数においては，平日も休日も3グループ以下と回答する生徒が8割を超えており，中学生に多く見られる1日のグループトーク数は，3グループ以下であることが示された。女子において

は休日の個人トーク数が10人を超えている生徒，4時間以上の生徒が約２割いることが明らかになった。このことから，大勢の友達と個人トークでコミュニケーションをとることで，LINEの利用時間が増えると考えられる。また，女子のグループトーク数においては，約９割が３グループ以下であることから，グループトークよりも，個人トークでのやり取りを重視していることが推察され，LINE利用時間が長くなると考える。女子は人との繋がりを求める傾向があることが(木村，2015)，個人トーク数の数にも影響していると考える。

学年ごとに見ると，３年生が他の1，２年生よりも個人トーク，グループトーク数が少ないが，これは受験というライフイベントが関係していることが考えられる。勉強に専念することから，自ずとLINEにかける時間も減少するのだろう。

(3)LINE機能からくる不安やプレッシャー

・既読機能

中学生では，個人トークで約７割，グループトークでは約５割の生徒が既読の確認をすると回答しており，特にグループトークよりも個人トークの方が既読の確認をすると回答した生徒が多いことが示された。また，メッセージを送る際に不安を感じる生徒は個人トークで約１割，グループトークでは約２割おり，グループトークの方が個人トークよりもメッセージを送る際に不安を感じる生徒が多いことが示され，多数の友達がメッセージを目にすることとなるグループトークの方が不安を感じていた。

自分が送ったメッセージを相手が読んだかどうか確認する生徒は半分以上いるが，メッセージを送る際に感じる不安はそれほど多くはない(約２割)ことから，自分の送ったメッセージがどう受け取られるか不安という消極的な理由よりも,「早く自分のメッセージを読んでくれないかな」「返信してくれないかな」といった相手への反応を求め，期待するという積極的な理由で既読の確認をしている生徒が多いことが推察される。特に３年生よりも１年生の方が，個人トーク場面で既読の確認を多くするという結果から，１年生の方が，LINEで相手への反応を求め，相手に対して期待を抱くことが考えられる。

また,既読時の返信のプレッシャーにおいては,少しの差であるが，グループトークよりも個人トークの方がプレッシャーを感じる生徒が多いことが明らかになった。

性別ごとに見ると，個人トーク・グループトークでメッセージを送る際に不安を感じている生徒は男子よりも女子の方が多く，個人トークでは１割，グループトークでは２割の生徒が不安を感じていた。先述したように，女子ではグループトークよりも個人トークにおけるやりとりが多く，LINEの利用時間に影響を与えていることが示唆された。グループトークでのやりとりが個人トークよりも少ないのは，個人トークよりもグループトークの方が，人数が多く，またそれほど仲の良くない友達や，苦手な友達もグループには含まれていることにより，メッセージを送る際に気を遣い，自分のメッセージがグループ全員に受け入れてもらえるか不安に感じるからだと考える。

・LINE外し

LINE外しの経験プレッシャーに男女，性別で差はなかった。LINE外しの経験は中学生の中でも１割が経験し，LINEはずしのプレッシャーは半数以上の生徒が感じていた。LINEは中学生にとって身近で，毎日利用するアプリであり，休日に４時間以上利用する生徒も存在した。LINEはずしへのプレッシャーを感じながら，友達とコミュニケーションをとっていることが考えられる。

(4) タイムラインの使い方

男子よりも女子の方がタイムラインに投稿することが明らかになった。これは，小野寺ら(2002b)や渋谷ら(2004)の研究と同じ結果であった。女性は男性よりも同族的な者に対してより積極的に開示する，とされていることから(小野寺ら，2002b)，今回の同性の友人という類似性によって，女子の自己開示は男子よりもより多くなったと考えられる。加えて，女子が男子より自己開示が多いという点は，中学生の一般的な特徴であると考えられる。次に，タイムラインの投稿内容である。男子より女子の方が「直接人に言えない悪口」,「LINEバトン」,「友達整理」の項目について多く投稿していた。女子のタイムライン投稿理由については「日々の出来事や感じたことを記録しておきたいから」,「共感してほしいから」「友達が投稿しているから」の理由でタイムラインを投稿する生徒が続いた。笹倉(2011)は，SNS上に記事を書く効用について，自分の問題や感情を整理し明確にするといった“自己理解の作用”や“浄化作用”，さらには“自分に共感してくれる他者と出会い，親しくなれる”ことを挙げており，SNSを利用する目的の一つとして，他者から理解される体験が出来ることも重要な動機づけとなっていることを指摘している。“自己理解の作用”や“浄化作用”の理由でタイムラインに

投稿する生徒は，「日々の出来事や感じたことを記録しておきたいから」,「直接人に言えない悪口」の内容を，他者から理解される体験を感じたい理由でタイムラインに投稿する生徒は「友達整理」の内容を投稿すると考えられる。友達整理においては，「LINE の友達人数を整理するので，友達から消されたくない人は，いいねスタンプを押してください」という内容である。もしいいねスタンプを押さなかったら“消しても良い人”として見なされ，ブロックされてしまう。このような中学生の投稿の背景にはいいねスタンプを押してもらいたい，受容してもらいたいという気持ちが背景にはあるのではないだろうか。いいねスタンプを押してもらうことで「あなたと私は友達ですよ」という目に見える確認が出来ることから，友達から受容してもらう体験をしているのではないかと考えられる。上述した笹倉 (2011) の指摘は中学生におけるタイムライン投稿や投稿理由を通して全体的に見られたが，より女子の方が強く感じていることが本研究の結果から示された。

タイムラインの公開範囲については，半分以上の生徒がタイムラインを公開していない友達がいると回答していた。中には，30 人以上の友達を公開範囲としているという生徒も約 1 割見られた。中学生のタイムライン投稿は，どの友達に公開するのか選んでいることが示され，LINE の友達中でも自分の投稿を見られたくない友達がいることが明らかになった。友達といえども，関係の浅い，深いがあり，自分のことを知られることに恐れを抱く友達もいる可能性が考えられる。

友達のタイムライン投稿について，ほとんどの生徒が友達のタイムライン投稿を見ていることが明らかになった。タイムラインの反応頻度については友達の投稿を見ても反応しないと回答した生徒は約 2 割おり，あと約 8 割はいいねスタンプやコメントを通して反応していることが示された。このようないいねスタンプやコメントを通して中学生は他者から共感や受容されることの経験をしていることが考えられる。筆者の経験からは，出会った中学生のタイムラインのいいねスタンプ数は時に 70 ～ 80 もあり，多くの生徒がいいねスタンプを押すことを日常的に行っていることが考えられる。だが，友達へのタイムライン投稿に対するいいねスタンプのプレッシャーを感じている生徒は，全体の約 1 割であった。プレッシャーを感じている生徒は多くはないことから，いいねスタンプは押さないといけないというプレッシャーではなく，事務的な作業となっている可能性が示唆される。

(5) 保護者による制限

保護者からの制限の有無について，約 2 割の生徒があると回答していた。本研究では，内容見るかどうかと，時間の制限があるかにしぼって回答した。男女では女子の方が，学年では 3 年生よりも 1 年生の方が制限のある生徒がいることが示された。女子は男子よりもつながりを求める傾向が強く (木村，2015)，LINE の利用時間が長いことが本研究において示されており，利用時間が長いことで保護者が見かねて制限することの可能性が考えられる。また，1 年生においては，自身の携帯や端末をまだ持っていない生徒も他の学年より多くいることから，保護者の携帯や端末を利用することで友達とコミュニケーションをとっていることが本研究で示された。保護者の携帯・端末を利用すると，制限もしやすく，保護者が LINE でのやりとりをいつでも見ることの出来る状況にいる。1 年生の方が保護者の制限がある生徒が多いのは，以上のことが影響していると考えられる。

今後の課題と展望

本研究では，保護者からの制限について，時間の制限があるか，内容を見るか，の 2 点に言及した。中学生は外的コントロールから，内的コントロールに移る段階であり，周囲の大人がコントロールを手助けすることが必要と考えられるが，今後は保護者からの制限についても子どもも同意の上なのかなど，制限の過程も考慮する必要があると考える。

引用文献

土井隆義　2008　友達地獄―「空気を読む」世代のサバイバル　ちくま新書

加藤千枝　2013 「SNS 疲れ」に繋がるネガティブ経験の実態―高校生 15 名への面接結果に基づいて　社会情報学　第 2 巻 1 号

木村留美子・喜多亜希子・水野真希・津田朗子 2015　小中学生のインターネット使用に関する実態調査：親の把握状況と親子間の認識の違い　金大医保つるま保健学会誌 39(1)　73 ～ 79

文部科学省　情報通信技術の活用の推進　平成 25 年度文部科学白書，388-400

小野寺正己・河村茂雄　2002b　中学生用学級内

自己開示尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　カウンセリング研究，35　133-138
笹倉尚子　2011　インターネットを介した自己表現　心理臨床の広場 4(1)　14-15　201
渋谷郁子・伊藤裕子 2004　中学生の自己開示―自己受容との関連で―　カウンセリング研究 37 250-259
総務省　インターネットの利用動向　平成 26 年版情報通信白書，337-353，
総務省情報通信政策研究所　2014　高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書
田淵優沙・則定百合子　2012　大学およびインターネットにいける自己開示に関する研究―不適応傾向、性格特性、インターネット利用時間との関連―　和歌山大学紀要 .
東京新聞　2013　ネット依存の子どもたち＜上＞「つながり」に縛られ　8 月 15 日
東京新聞　2013　子供どもとネット 「ラインいじめ」使い方　ルール決めさせて　9 月 13 日
植田康孝　2013　コミュニケーションを求める大学生気質～無料通話アプリ「ライン (LINE)」の急拡大